

# SUKUPAYNUUTAR 大阪 ORTAWEKARPPA 若いアイヌたち大阪に集う

普段は離れて暮らしている若い世代の同族たちと話し合う。それも大阪で、という珍しい経験をした。

三月二十五日から二六日にかけて、北海道そして東京にくらす若手のアイヌ民族一二名が、大阪に集結した。民博で開催された「先住民族としての若手アイヌの会」に集まった面々は、二〇歳から四〇代まで、出身地も活動内容も多様な人びとである。

## ●大阪にもアイヌ文化の基点が

北海道からは、北海道ウタリ協会（現アイヌ協会）関係者や、平取町出身の川上将史さん（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、そしてアイヌ民族博物館で研修中の川村このみさん（札幌市出身）、そして私の六名が参加した。川上さん、川村さんは研究者的な志向をもちつつ、芸能や祭礼の担い手としても研鑽をつんでいる、期待の若手だ。今回の議論のなかでも、現在の学習と、将来の希望を熱く語った。

東京からは、パフォーミングスグループ・アイヌレブルズのメンバー 酒井厚司さん、芳野省吾さん、館下直子さん（いずれも帯広市出身）、アイヌ文化交流センターの木原仁美

さんらが参加した。参加者の知人で大阪在住のアイヌ民族女性、藤戸裕子さん（阿寒出身）も出席した。

藤戸さんは大阪で「minami na no 会」というサークルを作り、アイヌの歌や手工芸を広める活動を展開中だという。私の知る限り大阪では初の試みだ。アイヌ文化普及の基点が全国にできつつあることを実感した。

簡単な自己紹介の後は、リラックした雰囲気でのフリートーク形式で参加者のこれまでの経験などが話し合われた。なにしろ、初めて顔を合わせる人も多く、仮に知人であっても「アイヌとは」といった話にまで及ぶことはめつたにない。まずは、互いの経験や価値観を共有することに時間をかけた。

## ●「アイヌ同士の差別」への危惧

話の流れから、館下さんが自身の経験した深刻な差別体験を語る場面があった。他の参加者からは「これが現代の話とは、とても信じられない」と、ショックを隠せない反応もあった。「差別はあるか」という話題ひとつをとっても、反応はさまざまである。性格や容貌など個人の事

情ばかりでなく、過ごしてきた環境や男女といった立場によって、同じ体験をしても受け止め方は異なる。

川村さんからはアイヌ同士の差別という話題もでた。私なりに彼女の意図を汲めば、「アイヌらしさ」が再評価されてくるなかで、「アイヌ的」容姿や「伝統文化」の知識、あるいはコネをもたないアイヌは排除される傾向にあるということだと思ふ。私も皮肉に感じている問題だが、注意しなければ深刻化する恐れがある。

今回の集まりでは、こうしたギャップの実感が、もっとも重要な成果だったのではないかと。昨年からの全国組織化への関心が高まり、具体的な検討もされている。そうしたなかで「誰がアイヌの声を代表し得るのか」という問題が再認識できたことは幸いだった。



討議の様子



主催者側から田村副館長による挨拶

きたはら じろうた  
北原次郎太  
財団法人アイヌ民族博物館  
学芸員

樺太を中心にアイヌの精神文化物質文化に関心をもつ。二〇〇八年から、口承文芸をデジタル絵本化し、アイヌ民族博物館のホームページで公開する作業に取り組む。